「オーガニックビレッジ宣言」

令和5（2023）年3月25日

市では、平成11（1999）年に小山市環境保全型農業推進方針を制定し、平成16（2004）年から減農薬・減化学肥料による特別栽培米の「生井っ子」、さらに平成24（2012）年からは有機栽培の「ふゆみずたんぼ米」の生産など、生物多様性に配慮し、環境負荷の少ない、持続可能な農業に取り組んできました。これらのかいもあって、渡良瀬遊水地において令和2（2020）年度から5年連続でコウノトリのひなが誕生するなどの成果を挙げることができました。

こうした中、環境への負荷は年々高まり、国は農業の生産力向上と持続可能な食料システムを構築するため、生産から加工・流通・消費まで一体となって取り組むこととする「みどりの食料システム戦略」を令和3（2021）年に策定しました。

同戦略では、2050年までに目指す姿として、「農林水産業の CO_2 ゼロエミッション化の実現」や、「化学農薬の使用量（リスク換算）を50%低減」、「輸入原料や化石燃料を原料とした化学肥料の使用量を30%低減」、「耕地面積に占める有機農業の取組面積の割合を25%に拡大」などを掲げています。

本市における令和6（2024）年度の有機農業取組面積は22.3ヘクタールで、全耕地面積7,740ヘクタール（2020年農林業センサス）に対する割合は約0.3%です。同戦略が定める有機農業の取組面積割合を25%にするためには、約83倍となる1,935ヘクタールの農地で有機農業に取り組む必要があります。これを実現するためには生産者だけではなく、あらゆる過程に関わる方の理解と協力が必要となります。

このことから、本市では国の施策の後押しを受け、有機農業を生産から加工・流通、そして消費に至るまで一体的に取り組むため、令和5（2023）年3月に「オーガニックビレッジ宣言」を県内で初めて宣言し、先進的モデル地区として各種取組みを推進しています。

現在は、市内小・中・義務教育学校の給食における米飯を100%有機米にすることを目指し、有機稲作の生産を拡大するとともに、有機野菜の生産拡大による学校給食への導入促進、消費者への理解醸成などに取り組んでいます。

「オーガニックビレッジ宣言」

小山市は、農業、商工業のバランスがよく広大な水田や畑が広がり、ラムサール条約湿地の渡良瀬遊水地につながる、コウノトリによって選ばれた田園環境都市です。

SDGsや環境に対する関心が国内外で高まり、カーボンニュートラルの実現や持続可能な農業の推進が求められる中、小山市は、生物多様性に配慮した持続可能な地域農業の発展と、都市環境と田園環境の調和のとれた田園環境都市の実現に向け、生産者から消費者までが一体となった有機農産物等の生産拡大や学校給食への導入などに取組み、人・いのちを大事にする有機農業を推進することを決意し、ここに「オーガニックビレッジ」を宣言します。

令和5年3月25日
小山市長　浅野 正富

田園環境都市おやまビジョン策定のための「調べる・共有する～学び合う～語り合う」実施取組み一覧

1｜調べる・共有する「調査と報告会」実施一覧

■令和3（2021）年度

01｜生井地区 風土性調査
7月～9月　アンケート回答者404人・聞き取り協力者25人

02｜シンポジウム「第20回全国菜の花サミットin小山」にて生井地区先行調査成果を報告
12月11日・12日、参加者約450人（11日：300人　12日：150人）

03｜生井地区 風土性調査報告会
3月22日　参加者20人

■令和4（2022）年度

04｜豊田地区 風土性調査
5月～7月　アンケート回答者1,168人・聞き取り協力者18人

05｜豊田地区 風土性調査報告会
9月22日　参加者32人

06｜小山地区 風土性調査
8月～12月 アンケート回答者655人・聞き取り協力者19人

07｜小山地区 風土性調査報告会
12月12日　参加者69人

08｜大谷北部・中部地区 風土性調査
12月～令和5年2月　アンケート回答者593人・聞き取り協力者16人

09｜大谷北部・中部地区 風土性調査報告会
3月13日　参加者43人

■令和5（2023）年度

10｜田園環境都市おやまのまちづくり初年度成果報告会
6月17日　参加者94人

11｜大谷南部地区 風土性調査
5月～7月　アンケート回答者521人・聞き取り協力者17人

12｜大谷南部地区 風土性調査報告会
8月22日　参加者27人

13｜桑地区 風土性調査
8月～10月　アンケート回答者724人・聞き取り協力者16人

14｜桑地区 風土性調査報告会
11月24日　参加者32人

15｜絹地区 風土性調査
11月～令和6年1月　アンケート回答者969人・聞き取り協力者26人

16｜絹地区 風土性調査報告会
2月15日　参加者44人

■令和6（2024）年度

17｜田園環境都市おやまビジョン中間報告会
6月1日　参加者121人

18｜間々田地区 風土性調査
4月～6月　アンケート回答者654人・聞き取り協力者15人

19｜間々田地区 風土性調査報告会
8月2日　参加者46人

20｜寒川地区 風土性調査
5月～7月　アンケート回答者171人・聞き取り協力者17人

21｜寒川地区 風土性調査報告会
9月6日　参加者 52 人

22｜中地区 風土性調査
5月～7月　アンケート回答者 415 人・聞き取り協力者 20 人

23｜中地区 風土性調査報告会
9月9日　参加者 32 人

24｜穂積地区 風土性調査
5月～7月　アンケート回答者 436 人・聞き取り協力者 16 人

25｜穂積地区 風土性調査報告会
9月18日　参加者 26 人

令和5（2023）年6月17日「田園環境都市おやまのまちづくり 初年度成果報告会」

令和6（2024）年6月1日「田園環境都市おやまビジョン中間報告会」

2｜学び合う「セミナー」実施内容一覧

令和5年度以降の市民参加のセミナーでは、講義内容の抜粋「学び」と、参加者アンケート自由記述の一部を「参加者感想」として記載します。

■令和3（2021）年度 庁内勉強会

01｜水循環から考える持続可能なまちづくり
講師：指出 一正氏（「ソトコト」編集長）
1月25日　参加者 35 人

02｜持続可能なまちづくりと、これからの行政
講師：毛塚 幹人氏（都市経営アドバイザー）
3月24日　参加者 52 人

■令和4（2022）年度 庁内勉強会

03｜環境と経済・社会の調和を考える
講師：廣瀬 俊介氏（LLP 風景社／環境デザイナー）
6月20日　参加者 47 人

04｜ローカル SDGs とパートナーシップ
講師：高橋 朝美氏（（一社）環境パートナーシップ会議関東 EPO 担当ディレクター）
10月26日　参加者 50 人

■令和5（2023）年度

05｜小山版 SDGs を探る　地域社会の持続可能性を支えるものは？
講師：高橋 朝美氏（（一社）環境パートナーシップ会議 関東 EPO 担当ディレクター）
8月28日　参加者 45 人

【学び】①地域を支える人のつながりをつくることが最も大切　②幸せの追求は誰もが持っている権利。ただ、自分の幸福は、誰かの不幸の上に成り立っているのではないかという「問題の外部化」にも関心を持ち、解決を考えていくこと　**【参加者感想】**「SDGs は環境のためではなく、人間のため。生物多様性は生き物がかわいそうだからではなく、人間が生きていくために必要だから…という説明に、今までモヤッとしていたことがストンとふに落ちました」「車社会を是としてきた北関東。温暖化の第一の原因は「車」だと 1990 年代からいわれてきたのに。目先の利益（移動の速さ、暑さ寒さを防げる）のみならず、次世代のことも考えている他地域の人たちからけげんに思われない行動と考え方をしていきたい」

06｜私やあなたの暮らしの「豊かさの指標」を考える
講師：山口 覚氏（慶應義塾大学大学院特任教授、（一社）まち家族代表理事、津屋崎ブランチ LLP 代表）
10月12日　参加者 33 人

【学び】①他者評価は気にしない。豊かさの指標は、地元の「当たり前」の幸福を大切に自分たちでつくるもの。自分たちの地域の価値は自分たちで決める　②風景をつくること、舞台をつくること～いろいろな人が「僕も！私も！」と出てくる　③かつてあった人の営みと哲学を新しい形で取り戻す　**【参加者感想】**「地元の価値を外からの視点から見出して地元の人と合わせ発信していく方法を考えていく必要に迫られていると感じた」「旧町村や字や、地域ごとの中規模の組織がいいと感じた。柔軟な発想力あるリーダーと資金が必要で、企業や協力事務所を巻き込んだ取組みや組織間の横の連携が大切」

07｜気候変動の時代に、おやまならではの「共生」を考える
講師：高橋 若菜氏（宇都宮大学国際学部 教授）
11月16日　参加者 37 人

【学び】①気候危機は市の共生社会へのリスク要因になる→緩和策・適応策が必要　②世界では気候危機対策は経済発展と両立するという認識。EU のグリーンディールでは温室効果ガスの排出を実質ゼロにすることで人々の幸福と健康の向上を目指す　③スウェーデン・マルメの都市ビジョン（持続可能な都市モビリティ戦略）と自然に根差した解決法（NBS）の実践例は市の参考になる　④市の対策次第で CO_2 削減率にも経済的影響にも将来に差異が出てくる　⑤エネルギー効率改善により共生社会は実現できる　**【参加者感想】**「脱炭素の取組みは私自身も我慢を強要されたり、膨大な費用がかかるもの、どちらかというと苦しいことというイメージがありました。今日のセミナーに参加して、むしろ生活の質の向上、経済効果、雇用の創出などが期待できることがわかりました。はじめの一歩として市民への啓発が大切であると感じました」

■令和6（2024）年度

08｜自然の恵みも人のつながりも地域で好循環を！
講師：野村 久徳氏（岐阜県飛騨市農林部長、防災士、社会福祉主事）
4月6日　参加者 42 人

【学び】自然の恵み（生態系サービス）をどのように生かして、行政・事業者・市民・教育機関の連携で、地域内のより良い循環を構築していくか？その大切なテーマで、先進地である岐阜県飛騨市の農林部長・野村さんより、旧古川町時代からの風土性調査を基にした様々な取組みを紹介していただいた。後半では、お話を参考にして市の自然の恵みを基にどんな循環をつくることができるかの意見交換を行った
【参加者感想】「経済、物質が地域で循環するというキーワードが印象に残っています。薬草や保全林の整備を切り口に、行政だけでなく市民や企業を巻き込んでいく手腕もとても印象的で、現場を見て知る姿勢がそこにつながっているのであろうと感じました」「アイデアがあるとして、それを専門家の方を交えて検証して、そのうえで、事業への協力者の方を募るプロセスが興味深く、多段階で外部や市民のリソースをたどる方法に気付きを得ました」

09｜私たちはローカルで幸せを見つける　～地域とのかかわりとウェルビーイング～
講師：指出 一正氏（「ソトコト」編集長）
9月28日　参加者 44 人

【学び】全国各地の様々な分野での取組み事例を「ウェルビーイング」「リジェネラティブ／リジェネレーション」の視点から話題提供していただき、後半は参加者が「市の現状と未来」に引き寄せた感想を語り、講師からそれぞれにコメントをいただいた。①地域との関わりが個々人のウェルビーイングの度合いを高める　②リジェネラティブ：従来の場所や仕組みを改善し、人がより幸福になるように取り組んでいく行為　③まちに関係人口・移住者が増えていくための「やわらかいインフラ」の存在が大切　④地域との関わりとウェルビーイングのリジェネラティブな視点～関わりしろをつくる・ご機嫌な状態をつくる・中長期的な幸せをつくる・ここにいるという安心感をつくる　**【参加者感想】**「不登校などネガティブなワードが、様々な取組みによって、ポジティブなことに変化していく、その過程が楽しい・楽しむということを大事にしていて、まさにウェルビーイングだと思いました」「地域の関わりに関心を持っていない人、気付いていない人をどうやってつないでいくのかが課題だと思いました」

3｜語り合う「ワークショップ」実施内容一覧

開催概要、ワークショップの成果物からの抜粋、参加者アンケート自由記述の一部を「参加者感想」として記載します。

■令和4（2022）年度

01｜職員対象ワークショップ・ローカルSDGsマップ作りワークショップ
講師：高橋 朝美氏（(一社）環境パートナーシップ会議 関東EPO 担当ディレクター）
1月23日　参加者16人

02｜生井地区・豊田地区・小山地区　3地区合同ワークショップ
1月31日　参加者40人

【概要】①3地区の実情の理解と共有を、風土生調査アンケート「大切にしたいもの」結果より作成したカードを用いて行う。②関係性を見出す（①を軸に、効果・阻害要因・関係性を描くマップを作る）③その過程で生じた疑問やモヤモヤから、これから考えていきたい「問い」を立てる。④問いに沿って、未来の市のあるべき姿を考え、言葉にしてみる　**【成果～立てられた問いとビジョンの芽】**①そもそもこのへん、どーなの？ 地域に自然だけでいいの？ 伝統の存続が、地域の維持につながるのか？ ②そもそも都市部と田園のつながりは必要か？ 何を生み出すのか？ 生み出せるのか？ ③そもそも、「利便性」とは何か？④そもそも「こどもたちが伸び伸び育つ環境」って「住み続けられる環境」なの？ ⑤そもそも「何でできないのか？」―難しいと思っているから？ ⑥そもそも興味がない？ 小山のこと知らない？　⑦そもそも今の小山の“ちょうどいい”は？ ⑧そもそも自然と利便性は、共存できるか？

■令和5（2023）年度

03｜無くしたい「不幸せ」と守りたい「幸福」からおやまのウェルビーイングを考える
11月2日　参加者29人

【概要】個々人の生活で「A 豊かさや幸福を感じること」「B 不幸・不満・虚しさを感じること」を共有し、それぞれについて「A 幸福を支えるものと不幸をなくすもの」「B 幸福を阻害するものと不幸の原因」について、市民生活・地域社会・行政の領域で意見交換を行った　**【参加者感想】**「自分の身近な幸せや不幸から未来の市についてこうなってほしいという希望や姿を導き出すことがとても楽しかった」「支援は補助金とかではなく、組織づくり、人づくりが最も大切で、行政が企業や各種団体とのつなぎ役をやってほしい」など

04｜自然の恵み（おやまの生態系サービス）からウェルビーイングな未来を考える
12月2日　参加者28人

【概要】前半は、生態系サービスについて話題提供によりインプットの時間、後半は、生態系サービスを「自分ごと」として捉えるためのグループワークを行った。後半では、前半の学びや風土性調査の成果資料を基に、まず市の生態系サービスの現状について把握し、その状況をどのように軌道修正して未来へつないでいくかを、生態系サービスの「トレードオフ（不均衡な状態）」と「シナジー（プラスの最大化）」という概念を用いてグループワークで考えた。**【参加者感想】**「市街地で生まれ育ったので、市にある自然や農地について今回のように考えたことがなかったが、その大切さや、皆が大切にしていることを知る機会となった」「年齢、立場の違う人の発言が聞けて新しい発見がありました。視点を変えると違ったものが見えて多くの学びを得ました」

05｜おやまの未来に、地域を支える「ひとのつながり」をどうつくる
1月20日　参加者34人

【概要】6つのテーブルごとにテーマを設定しビジョン会議委員がホストとして付き、ワールドカフェスタイルで、時間を決めて移動しながら、意見交換を重ねた。テーマは、①地元民と移住者の関係　②自治会など地域の組織のこれから　③世代間の意識のギャップ　④農業や地域活動の担い手づくり　⑤こどもたちと地域　⑥社会的に弱い立場の方々と地域の6つで、それぞれについて風土性調査に寄せられた市民の声をまとめた資料を、意見交換の参考に配布して進行した　**【参加者感想】**「ワールドカフェ方式はとても良いですね！色々な意見をいろいろなテーマで話せるのでお得感がありました」「様々な立場の人の思い、意見が聞けたことが良かった」「組織（社会）継続のための仲間づくり、情報発信、難題ばかりだと痛感した」

06｜特別編：ファーマーズミーティング～都市部と農村部、農家と非農家の関係をどうつなぐか
2月2日　参加者34人

【概要】市域複数地区の農業事業者の方が集まり語り合う場を創出。前半のインプットでは、市の農業の現状についての説明、風土性調査成果から農業に関する内容の情報提供。後半はアンケートやグループインタビューで集まった市民（農家／非農家）の声を基にグループディスカッションを行った。　**【参加者感想】**「昔と比べると、農家と非農家の意識のズレ、隔たりが大きい」「有機栽培で育ててもその売り先はあるのか？大規模にやっていると有機栽培への転換は難しい」「農協などの組織も、相談があって動くのではなくもっと積極的に法人化を勧めることや情報提供に動いた方が良い」「遊休農地への県外からの法人の進出は、もうからないとなるとすぐ撤退し、地域に根付かないので問題も多い」「マルシェに出店して消費者と話しておいしいと認められるより、まずは経営をしっかりすることに時間を使いたい」

07｜大谷北部・中部地区・大谷南部地区・桑地区・絹地区　4地区合同ワークショップ
2月18日　参加者60人

【概要】前半で、風土性調査の成果報告と、各地区に取材に入りウェブマガジン「おやまアサッテ広場」に、「地区の未来の物語」を連載している白鷗大学地域メディア実践ゼミから報告を行った。後半では、①調査成果を通してお互いの地域を知るための情報交換　②生活の利便性と自然環境保全の幸福なバランスを探るワーク　③ここまでのワークなどを通して、未来のビジョンを考えるワークを行った。　**【各班が導いたビジョン】**①都市部と田園部の二極化は進むという前提で、田園部に対して自然とIT技術の掛け合わせや、地区間や世代間の交流を進め、地区内の問題解決が進む未来　②小中学校から体験教育やキャリア教育が充実して、人を育てることができ

る未来に。また田園部の生産者のやりがいが高められるような公的資金によるシステム構築で、生産者・売る人・消費者の三方よしの未来に　③生活の利便性に資する形で、自然環境を利活用するまちに。都市部と農村部が連携して、住みたいところに住むことができ、ウェルビーイングを重視するまちに　④今の市のポテンシャルに加える形で、子育て・教育・都市部と農村部の行き来の交通利便性の向上・農業と食育などが充実し、こどもが輝く未来に　⑤異なる立場や多様な価値観を尊重しながら、いつの時代もその時にあった「ちょうどいい」を話し合いで決めていく未来に　⑥ OYAMA 11（イレブン）～11 地区それぞれの特徴を生かして協力し合いながら、市全体の便利さと自然のバランスを保つ未来に

セミナーやワークショップでの成果を基に、令和６年版のポスターを制作し市内各所に掲示しました。

■令和6（2024）年度

08｜特別編：高校生・大学生参加「私たちが描く おやまの未来 座談会」

5月18日　参加者46人

【概要（語り合ったテーマ）】⑴将来に対して関心があること　①少子高齢化による自分たちの世代への負担増　②気候危機　③学校に行かない選択をした児童生徒の増加　⑵高校生と大学生の視点でウェルビーイングにつながるまちづくりの提案　⑶今後の課題　①環境保全と開発、人間と自然の共存をどう考えていくのか　②ヤングケアラーや社会的弱者への配慮

09｜講義とワークショップ「人口減少時代の地域づくりとその支え手を考える」

講師：石井（いしい） 大一朗（だいいちろう）氏（宇都宮大学地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科 教授）

6月22日　参加者32人

【概要】前半：石井先生から県内各地の自治組織運営に関する事例と、これからの時代の地域づくりと自治組織の望ましい在り方についての講義。後半：グループごとに「私たちのウェルビーイングプロジェクトを作るぞ企画」を組み立て、発表してコメントし合う時間を設けた。**【学び】**①地域づくりは課題解決ではなく「主体形成」に重きを置く　②課題があるから始めるのではなく、こうありたいという希望と現実のギャップをニーズとして、それが一定の範囲内で集まったものが地域づくりになる　③コミュニケーションを取る場をつくることが大切　**【参加者感想】**「イノベーション（新結合）の必要性を知りました。新しい発想も出てきて良かったです」「今までの固定概念にとらわれない新しいプラットフォームが必要。どうしたらそれができるか考えることが大切だと思いました」

10｜講義とワークショップ「田園環境都市おやまのライフスタイルを考える」

講師：西山（にしやま） 未真（みま）氏（宇都宮大学農学部農業経済学科 教授）

8月25日　参加者34人

【概要】風土性調査やワークショップなどで浮かび上がってきた「市の農業や田園地帯を、市／市民でどう支えていくか?」をテーマで、講義とグループディスカッションの時間を設けた。前半：西山先生から、個々人のライフスタイルという視点から様々なデータや知見を基にした講義。後半：①田園環境都市おやまのライフスタイルを具体的に考える　②そのライフスタイルを実現するために必要なことは？　というテーマでグループごとに意見交換を行い、発表してコメントし合う時間を設けた。**【学び】**①都市と農村の分断＝共倒れ構造にある、都市と農村が共創する社会＝持続可能な社会　②都市と農村の共創～人の流れが変わる、人と人のつながりが変わる、人の価値観が変わる③都市と農村それぞれの機能が両方あり補完し合う関係が地域社会発展の原動力、両機能が重なり合う部分を充実させていく　**【参加者感想】**「都市と農村のつながりが必要であり、それが希薄化しつつあること。それを再度実感し、今後に対策を取らなければならないという実情を把握しました」「循環した地域を目指したい気持ちが高くなった」「地産地消の間口が少ないというのは新たな視点だったし、都市と農村の距離が近くないと成り立たないものだと気付いた」

11｜間々田地区・寒川地区・中地区・穂積地区４地区合同ワークショップ

10月5日　参加者53人

【概要】前半：４地区の風土性調査成果の概要を報告し、各地区のビジョン素案の方向性について報告を行った。後半：ワークショップ ①４地区の方と市職員の混成のグループで、調査成果を基にお互いの地区の実情についての情報交換　②地区ごとのグループに分かれて、ビジョンの方向性について意見交換。　**【参加者感想】**「市街化調整区域の方だけの集まりでしたので、同じ問題を抱えていることがわかりました」「地域ごとの現状がわかり良かったと思う」「他の地区の方との情報交換や交流がとても貴重なものでした」

12｜将来世代とともに考える、ウェルビーイングな未来、実現への道

10月13日　参加者32人

【概要】①過去・現在・未来の軸を通す他地域での事例の話題提供　②大学生２人から未来に対しての問題提起　③将来世代と社会人と市職員の混成のグループで「将来世代の不安を、どんなプロセスでウェルビーイングな未来に変えていけるか」をテーマにディスカッション。問題提起やディスカッションで取り上げられた主なトピックは、①将来、少子高齢化により働き世代への税金などの負担が増える不安、経済的に生活していけるかという心配②老若男女にも外国人の人たちにも「人と人のつながり」が大切。小山だから実現できることは？③生きづらさを感じる人が多い社会をどう変えていく？　**【参加者感想】**「当たり前に問題に思うことでも、世代や立場の違いで、これほどまでに多種多様な意見が出るのだなと、自分の中での問題意識について、考えを深めることができました」「全ての班で取り上げたテーマが多岐にわたったこと。前向きに未来を考えて行くことが、こんなに面白かったのかと、あらためて発見できました」

令和５（2023）年10月13日 学び合うセミナー「私やあなたの暮らしの「豊かさの指標」を考える」

令和6（2024）年６月22日 講義とワークショップ「人口減少時代の地域づくりとその支え手を考える」

令和6（2024）年10月5日「間々田地区・寒川地区・中地区・穂積地区 ４地区合同ワークショップ」

田園環境都市おやまビジョン策定メンバー

おやま市民ビジョン会議委員（五十音順）

【座長】 阿久津 治

【副座長】 飯野 佳昭　　土方 美代

【委員】 安達 晃太　　板倉 一平　　伊藤 弘子　　戎 奈央　　海老沼 和彦
海老沼 成彦　　柏﨑 清美　　菊池 浩文　　小林 正樹　　小林 千恵
佐藤 忠博　　佐藤 佑子　　篠崎 尊久　　嶋田 積男　　高橋 栄
武 浩美　　竹本 真誠　　長濱 貴規　　福本 佳之　　古河 大輔
吉田 稔　　渡邉 正道

地区別ビジョンオブザーバー（五十音順）

荒井 聡　　大出 純　　工藤 かや　　齋藤 雄志　　椎名 俊裕
菅沼 英明　　初澤 晃　　福田 滋紀　　松沼 健　　山中 弘道

小山市民の皆さま

●風土性調査アンケート回答者総数　6,710人の皆さま
●風土性調査グループインタビュー／個別聞き取り協力者総数　205人の皆さま
●市民アンケート回答者総数　延べ13,756件の皆さま
●おやま市民ビジョン会議シリーズ（セミナー／ワークショップ）参加総数　823人の皆さま
●地区別ビジョン意見交換会参加者総数　231人の皆さま

コラージュ作品制作者

安達 晃太　　柏﨑 美貴　　栗島 怜児　　黒崎 孝佑　　齋藤 佳礼奈　　白岩 大夢
辻 颯太　　遠矢 瑞姫　　長津 猛琉

アサッテ広場　20代のレポート「未来発！おやまノート」執筆

白鷗大学地域メディア実践ゼミの皆さま

秘書課
総合政策部
田園環境都市推進課
庁内プロジェクトチーム46人
策定支援：有限責任事業組合 風景社

田園環境都市おやまビジョン　別添資料一覧

ビジョン策定に当たって、その基礎とした各種調査などの成果一覧です。
市ホームページで公開しているデータにつきましては、二次元コードからご覧いただけます。

1｜風土性調査成果

【小山地区】
01 基礎資料
02 基礎資料概要版
03 基礎資料図版集
04 アンケート集計結果報告書

【大谷北部・中部地区】
05 基礎資料
06 基礎資料概要版
07 基礎資料図版集
08 アンケート集計結果報告書

【大谷南部地区】
09 基礎資料
10 基礎資料概要版
11 基礎資料図版集
12 アンケート集計結果報告書

【間々田地区】
13 基礎資料
14 基礎資料概要版
15 基礎資料図版集
16 アンケート集計結果報告書

【生井地区】
17 基礎資料
18 基礎資料概要版
19 基礎資料図版集
20 アンケート集計結果報告書

【寒川地区】
21 基礎資料
22 基礎資料概要版
23 基礎資料図版集
24 アンケート集計結果報告書

【豊田地区】
25 基礎資料
26 基礎資料概要版
27 基礎資料図版集
28 アンケート集計結果報告書

【中地区】
29 基礎資料
30 基礎資料概要版
31 基礎資料図版集
32 アンケート集計結果報告書

【穂積地区】
33 基礎資料
34 基礎資料概要版
35 基礎資料図版集
36 アンケート集計結果報告書

【桑地区】
37 基礎資料
38 基礎資料概要版
39 基礎資料図版集
40 アンケート集計結果報告書

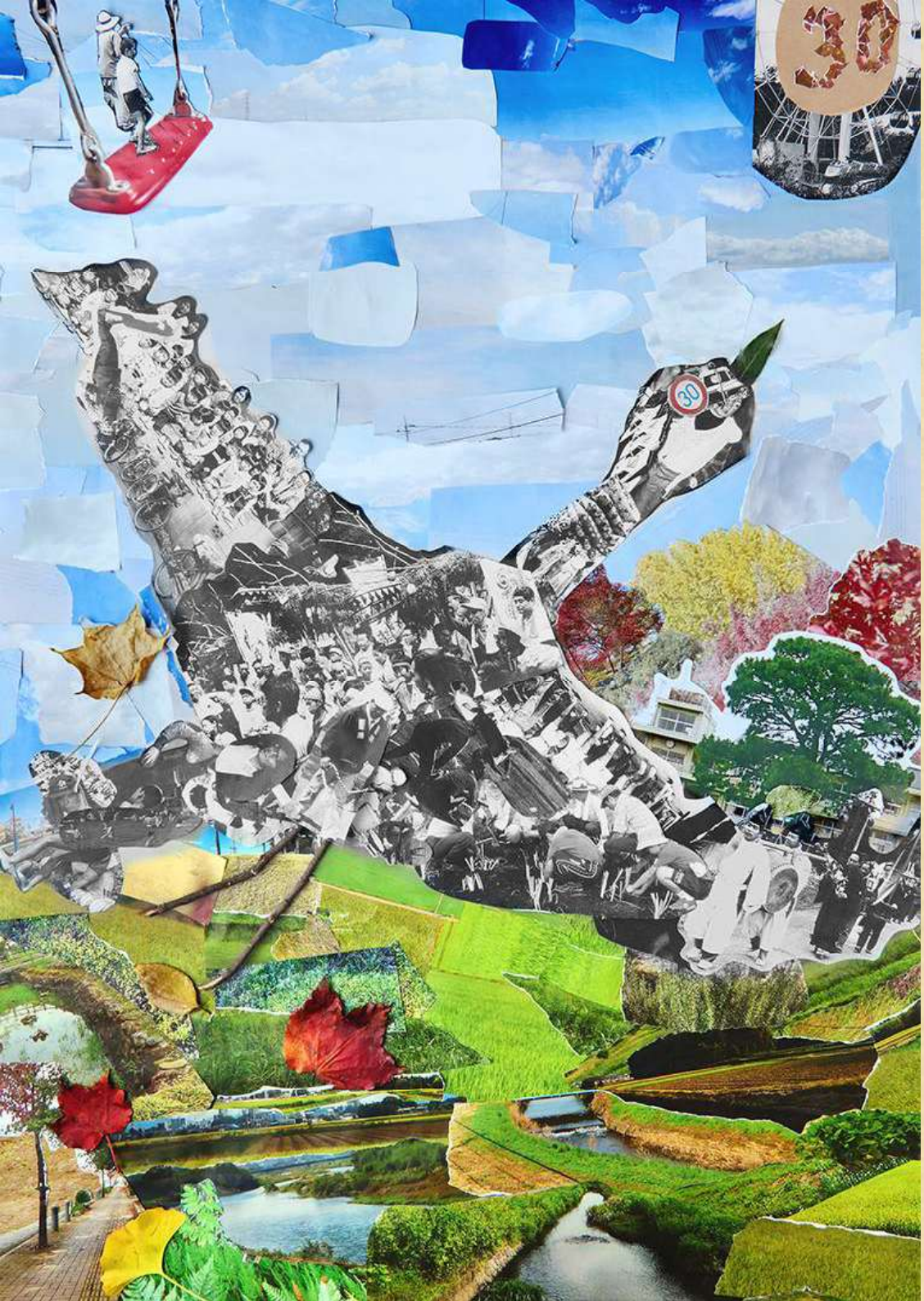
【絹地区】
41 基礎資料
42 基礎資料概要版
43 基礎資料図版集
44 アンケート集計結果報告書

45 生態系サービス一覧（11地区別のリスト）

2｜市民アンケート
46 市民アンケート集計結果報告書

3｜市民フォーラム
47 市民フォーラム記録集

4｜まちづくり構想
48 まちづくり構想団体に関する資料


30
30

OYAMA VISION

日本計画行政学会
第21回計画賞（2025年度）
優秀賞 受賞

本賞は、計画行政に関する学問体系の確立に資することを目的として設立された
一般社団法人日本計画行政学会において、優れた計画を発掘し表彰することで、
社会全体の計画能力の向上を図るものとして1995年度に創設された賞です。

田園環境都市おやまビジョン ―全ての市民のウェルビーイングの実現を目指して―

令和7（2025）年3月 ｜ 発行：小山市 ｜ 制作：総合政策部田園環境都市推進課